患者さんと川上医院のコミュニティ誌

かわかみ通信 むすび

Vol. 54

2022年1月
睦月号

川上正志 顕彰特別企画

令和壬寅年

円山応挙の「水呑虎図」。1928年に売りに出された後所在不明だった。大阪道頓堀の飲食店「大阪名物くいだおれ」(閉店)の創業者だった故山田六郎氏の倉庫から85年ぶりに発見された

新年明けましておめでとうございます。皆様にはご健勝にて、コロナにも負けず、新しい年をお迎えになられたことと、お慶び申し上げます。

昨年は「コロナ、コロナ」、気詰まりで気忙しい年でした。今年早々第三回目のコロナワクチン接種が始まる予定です。市から接種のお知らせが届いたら、市のコールセンターに予約をすることになります。まだ情報が曖昧で具体的にどうなるのか不透明なこともあるので、市からのお知らせに注意して下さい。接種を希望される方は、あわてることはないですが忘れないうちに市へ予約して下さい。

昨年、父の俳句などに関連したコレクションを市博物館で展示して頂きました。敦賀市はご存知のように、「奥の細道」に書かれてありますが、俳聖芭蕉が月を見るために立ち寄り多くの句をのこしたことで知られたところです。しかしそれだけではありません。あまり大きくは取り上げられていませんが、近現代の俳句作家も訪れることが多かったところでもあります。碑として具体的に残っているのは、高浜虚子、石田波郷、石塚友二、のものだけですが、色ヶ浜の本隆寺で父の属する俳句結社「鶴」の北陸大会が開催されたりして多くの方々が来敦されました。また我が家にも多くの俳人が来られ、私が幼少の頃なぜか同席したことを記憶しています。金子兜太氏。角川源義氏。「鶴」の結社のお歴々などです。

その意味で正岡子規以降現在に続く近現代俳句にとってある意味では俳句の聖地といっても言い過ぎではないと、私は密かに思っています。

港都つるが（株）の毎年開催してきた全国俳句大会もこの伝統を継いでいるものです。敦賀の俳句を作る方々の高齢化、後の世代との断絶が心配です。私は古希を迎える少し前からぽつぽつと俳句のようなものを作り始めました。そして「敦賀の細道」に俳句らしきものを載せると宣言してしまいましたので、もう少し早く始めれば良かった、父の元気な時に教えて貰っておけば良かった、と後悔する今日この頃ではあります。

今から６０年以上前のことで記憶違いがあるかも知れません。父の師、石田波郷先生の東京武蔵野のご自宅を、父が訪問、お見舞いする際、私も同行した覚えがあります。この時はおそらく「鶴」の全国大会が浅草で行われた時で、何故か私はついていった？　連れていかれた？　のです。私は近くの遊園地？　で遊んでいただけですが。今になって、父は私に俳句の世界に入って欲しかったのかな、と思う次第です。

今回、父のコレクション展を記念し、また俳句の聖地としての敦賀の新しい視点を提示し、少しでも俳句に興味を持って頂ければとよたよたと放浪してきました。

（追記）近現代俳人の系譜―熊谷市文化遺産研究会、熊谷俳諧文化研究会発行から、私が少しでもお名前を存じ上げている方々を中心に抜粋し、また若干の変更をし、当院で活動しておられる金魚の会関係を付け加えて、正岡子規から、金魚の会に至る俳句作家の系譜を作ってみました。作風はそれぞれ特徴があるようです。俳句に対する思いの違いから師と袂をわかつようなことが有ったようです。

（３面に近代俳人系譜を掲載）

「師弟碑の並ぶ社に落ち葉踏む」

「競い立ち冬波を聞く碑ふたつ」

川上医院　院長　川上　究

つるがの細道 よたよた歩きの奮闘記 第二十弾

かわかみきせせきをめぐるまき

【川上季石を巡る巻】

久しぶりのよたよた歩き。はじめは少し誇張気味につけたタイトル。今では自他ともに認める「よたよた歩きの奮闘記」になってしまった。「マジか」。特に今日は風が冷たい。両人とも腰に不安がある。したがって車にて散歩と相成った。これを散歩というか、言わぬかは別にして「無理しない、無理しない」。

今回のテーマは「川上正志さんの顕彰」。俳号を「季石」という。その川上正志さんが詠んだ俳句の石碑が市内にあるというので、その句碑を見るお散歩と行きますか。

季石さんの句碑といえば二か所、先ずは地元松島町にある神明神社へ。入って正面の本殿にオッサン2人で拝礼参拝。

「これやこれや」Qちゃんの声で振り向くと句碑がある。

「往診と言ふ道があり麥の秋」

松島町の神明社の本殿にて先ずは参拝から

神明社境内にある正志（季石）さんの句碑

古希を記念して植樹した桜の横でQちゃん

「これがそうか」自分が作った俳句が石碑になるって、すごいことやなぁ。改めて感心しきりだ。

「これわしが植えたやつや」見るとひょろひょろっとした苗木がある。Qちゃん「古希の時を記念に植樹したんや」それは桜の苗木。この樹が見頃になる頃には花見で一献したいものだ。

その脇に石田波郷（はきょう）の句碑がある。正志さんの師匠であり、「鶴」創刊、人間探求派の俳人である。これは正志さんの平成4年の叙勲を記念して、「青砂」発足10周年記念誌に寄せられた波郷の序文により正志さんが建立したもの。

同じ神明社境内にある石田波郷の句碑

「ついでに松原公園にある高濱虚子の句碑を見ていこう」公園入り口を入ると左手に大きな石碑。これは俳人の高濱虚子さんが敦賀に来た時を記念して造られた句碑が風化損傷したため、作り直した二代目の句碑ということだ。

高濱虚子来敦を記念した句碑

その付近に少し小ぶりな句碑があるが、これは波郷の盟友にあたる石塚友二さんが敦賀に来られたことを記念し、建立されたものだ。

こうしてみると正志さんという人は今さらながらすごい人だったことがよくわかる。小生と正志さんとのお付き合いは晩年になってから。良き好々爺。静かで、お酒が入ると民謡を謡う、俳句を詠む。その仲間たちとの交流が実に楽しそうな表情をしていたのを覚えている。

今号は正志さんの顕彰という企画で記事を俳句仲間の中者正治さんにお願いしたところ、大量の原稿が寄せられた。正志さんに寄せる畏敬の念には驚ろかされる。原稿の字間に愛情があふれている。これは本誌の紙面ではとても収まらない。刊行著書だけでも何冊もある。顕彰とは言ったものの、本来は正志さんの実績を書きのこすだけで一冊の本になるほどだ。今回はその入り口をご紹介するだけに留めておこう。

「初句会紡ぐ師弟の絆かな」

「後塵は排すべからず萩若葉」

虚子の句碑近くにある石塚友二の碑

「次は金ヶ崎に行こう」車を走らせ、金前寺前に到着。2ヶ所目になる季石さんの石碑はこの金ヶ崎神社の石段の途中にある、愛宕神社の鳥居の脇にある。気を付けて見ていなければ見過ごしてしまいそう。

「花換や沖ゆく船のさみしくて」

これは昭和63年3月に季石さんの師匠である水原秋櫻子・石田波郷より曽宮一念への書簡集「硝子の向ふに出る」出版の記念に建立された。正志さんが金ヶ崎に立ち、海を見ながら詠んだ句に耽る。

金ヶ崎宮の石段途中にある愛宕神社鳥居横にある季石さんの句碑

正月に友人との懇親の場で、楽し気に過ごす正志さん

【発行】令和4年1月4日（火）
かわかみ通信むすびVol. 54
（睦月号）
医療法人 川上医院
福井県敦賀市松原町1-39
TEL：0770-22-0977

特別企画

生誕102年記念 川上正志（季石）さん顕彰

在りし日の正志さん。お酒が入ると俳句と民謡が出る

川上医院創設者であり、究先生の父上。いわずと知れた県内俳壇の重鎮だった。俳号を季石という。

今年は正志さん生誕１０２年。本来ならば１００歳を記念して顕彰計画すべきだったのだが、まさにコロナ禍。いま少し感染状況が落ち着いたところで２年を超えての顕彰記事となった。

正志さんは若いころからいろんな活動を続けてこられた。俳句をはじめ「剣道」「民謡」「バレーボール」他にも多方面に才能を発揮した。

今回は「青砂俳句会」の現主宰である中者正治（俳号正機）さんに俳句を通して正志さんの思い出を綴ってもらった。

【正志さんのプロフィール】

- 大正9年(1920)10月29日
  福井県丹生郡越前町小樟生まれ
- 平成27年(2015)5月14日没(享年94歳)
- 石田波郷門下。「鶴」同人・俳人協会々員
- 1956年から「青砂俳句会」主宰
- 1985年福井県文化賞受賞
- 1992年春叙勲勲五等双光旭日章
- この叙勲を記念して句碑を建立
- 松尾芭蕉の句碑を市内11か所に建立し「芭蕉杖置きの地・敦賀」を広めたのをはじめ県内俳壇の発展に寄与
- 1988年から14年間県文協会長を務め、同文協の社団法人化や第20回国民文化祭・ふくい2005の誘致に尽力
- 2006年に福井新聞文化賞
- 53年にわたり警察嘱託医を務めるなど多方面の公職を兼務し活躍した

川上季石先生と俳句

川上医院の受付窓口の右側は、湾曲した半透明な面になっており、よく見ると模様のように見えるが、勢いのある筆の俳句が浮き出てくる。

「十薬や病みてかがやくことばあり」

医師として患者を診ていると、いろいろな言葉に出会うが、ふと聞いた一言を、輝くようだととらえた句である。患者の言葉が冷静に、暖かくうけとめられている。

著書「葦」掲載作品。川上医院受付右にあるコーナーガラスに見る

「海に出てつねに灰色海鼠曳き」

季石先生の俳句との出会いは、先生が平成二年十月二十九日に発行された句集「流灯」のあとがきに、旧制中学校の国語の先生のお顔がいつも胸中にあって、その頃の句の一つ二つはすぐに口ずさむことができるとあり、また、出生地の越前町小樟で、医業を開業されていた、昭和二十二年に俳句会を結成して冊子「石投」を発行されていたとある。

昭和二十八年十一月に敦賀に移住されると、当地の中川志帆氏らと、新俳句運動を始められ、昭和二十九年十一月に北陸俳句大会を開催するなど、敦賀に新しい俳句の拡大に取り組まれている。

俳句の全国結社である「鶴」に加入されたのは、昭和三十年であり、先生になぜ鶴を選ばれたのかお聞きすると鶴主宰者石田波郷の句「鰯雲ひろがりひろがり創痛む」に感動したからだと教えてくれた。

「葦」掲載作品。この著書は全て季石さん直筆の作品集だ

「花換や沖ゆく船のさみしくて」

この句は昭和五十年四月の句であり、金崎宮参道の右側にある愛宕神社前に、昭和六十三年三月に句碑として建立された。式典に参列された高木市長は寂しそうな句やなとつぶやいておられたが、先生の胸の内は、誰も聞かれることはなかった。明治十三年に始まった花換は、優雅な花見行事であるが、金崎宮には南北朝の戦で、亡くなった武士らが祀られている。

「葦」掲載作品。金ヶ崎愛宕神社鳥居横に句碑がある

「往診といふ道があり麥の秋」

この句は、松島の神明社境内に、先生の勲五等双光旭日章叙勲を記念して、平成四年に建立された句碑になっている。平成四年は結社の鶴俳句会鍛錬会が、当地で開催されることになり、各地から来られる皆さんに、見ていただくものをと、書家の千葉半厓先生に相談すると、青砂俳句会結成十周年記念句集の波郷先生の序文にある句の

「春雷やここにも巨き一家族波郷」

を師弟句碑として、一緒に建てたらということになり、先生は、波郷先生の句碑から、離して立てるならと、条件付きで承諾された。先生の句はとお尋ねすると「往診といふ道があり麥の秋」をと言われ、奥様も即座に賛同された。（句碑の写真が４面に掲載されている）

この句には、平成二年に出版された先生の句集「流灯」に、鶴三代目主宰星野麦丘人先生が、序文に取り上げておられるので紹介する。

「医者としてせわしい往診の中で詠んだ句に、作者の心にあるゆとりが見られる。気負いがなく純粋で、職業俳句に見られがちな押し付けがましさが微塵もない。ゆとりがありしぜんな構えから生まれてくる句には安心がある。」季石先生のお人柄が偲ばれる句評である。

友二先生との出逢い

昭和六十一年六月に松原公園の小学校の西側に、鶴の二代目主宰である、石塚友二先生の句碑を、青砂俳句会の会員他の有志により建立した。季石先生は、昭和三十五年の青砂俳句会発足三年目の年に、友二先生をお迎えして、鶴俳句会敦賀大会を開催された。色ヶ浜への吟行は、現在のような陸路がないため、小型船で行かれたという。大会はあたたかみのある催であったと回想されている。

「鶴」俳句会敦賀大会を主催。季石さんと石塚友二氏

友二先生はそのあと敦賀へ二回見えられている。昭和四十一年は、青砂俳句会の十周年記念行事の、鶴北陸大会であり、関東から大勢の鶴同人が友二先生に同行した。

「後塵は拝すべからず萩若葉友二」

句碑に刻まれたこの句は、そのおりの句である。季石先生の旧宅で宿泊された友二先生は、同人の皆さんが色の浜へお誘いすると、ビールが好きだった先生は、行かないと言って杯を傾けておられた。以前に行かれたところだからかもしれないが、大勢の同人が、句を拾っていった後を行くのはご免だよと、悠然と構えて詠まれた句なのである。

昭和六十一年に発行した、青砂句会の合同句集である、石塚友二句碑建立記念・青砂三十周年記念「青砂」のあとがきで、先生は友二先生について、俳句は勿論、人間的にも多くのことを学んできたと書かれている。友二先生への思いには深いものがあった。この句碑の建立のお許しを貰うために、建立前年の一月に季石先生、高岸まなぶ氏と三人で鎌倉の友二先生を尋ねた。後塵の句をとお願いすると、友二先生は、「こんな句でいいのかね」と言われながら了解された。帰り際に「星涼しいづこの道を辿りても」が印刷された団扇を頂いた。

季石先生の著作

昭和三十一年青砂俳句会を結成されると、機関誌の青砂を四十三年まで刊行され、昭和四十一年に十周年記念句集「青砂」を編纂された。病床の波郷先生の序文に、一度敦賀へ行ってみたいとあり、二十人の同志の句は、個性がありながら、しっかりと生活に根を下ろし、俳句でその生を、闊達自在に読み続けていると、評価されている。また、添付された季石先生労作の敦賀歳時記に、例句を詠んでほしいと記している。

昭和六十一年に発行された三十周年記念句集は、一人宛て四九句を掲載し、冒頭に波郷先生の扁額と会員が所蔵していた友二先生の色紙、短冊などを、写真家の山本喬氏が撮影して掲載された。

墨書作品集「葦」出版記念式典の様子。奥様静子夫人と共に

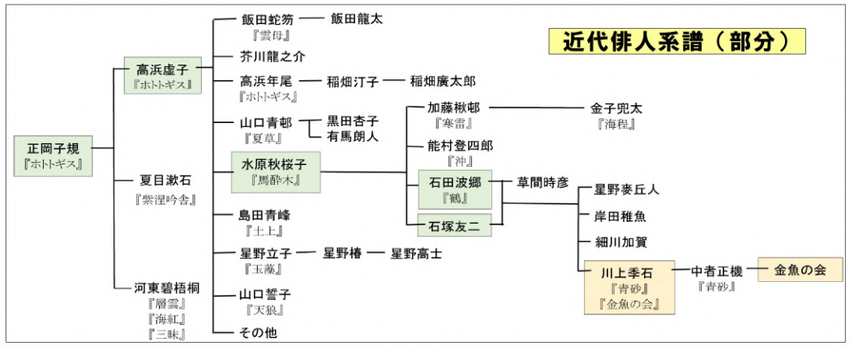
昭和五十五年には千葉先生に勧められて、季石百句「葦」を発行された。句はすべて墨書であり、異色の句集であったが、還暦を迎えられた先生は、句集でなく世間では余暇の句集のたぐいだと謙遜された。平成二年に先生の全句集ともいうべき、「流灯」を出版された。一千句を超える句数であり、序文で星野麦丘人先生は、俳句は生涯をかけて詠む詩である。長い間休まず努めてきた俳人には、巧拙はなく、あるのはただ「自分の俳句」を詠むことだけであると記されている。季石先生も長寿社会の中で、生かされていくことに感謝しながら、俳句の過客として歩き続けたいと記されている。

平成六年には、先生が長年芭蕉について研究された資料他から、「芭蕉越前を歩く」を出版された。「奥の細道」における芭蕉と越前、とりわけ敦賀とのかかわりを、詳細に記載されている。また、芭蕉が「月清し遊行のもてる砂の上」と詠んだ遊行砂持神事の行事に、先生は昭和五十八年と、平成六年の実行委員会の会長を務められ、詳細な記録を掲載されている。

お砂持ち実行委員会会長として２度勤められた。中央が季石さん

先生の著作で異色といえば、千葉半厓先生と親交のあった有名な曾宮一念画伯から季石先生にと渡された水原秋櫻子、石田波郷の書簡の束を、死蔵するのは忍び難いとして、書籍「硝子の向こふに出る」に編纂、出版されたことである。

半厓先生は、晩年に失明された曾宮先生の墨書に協力されている。曾宮先生は敦賀の陶芸家北村作太郎氏とも親交があり、来敦されていたと紹介されている。季石先生は、水原秋櫻子先生の書簡にあった言葉を、題字に拝借させてもらい、この境地に達するには、生涯をかけなければならないと、述べられている。

※季石先生の代表的な俳句その他をという、編集者の申し出があり、思いつくままに書いたので、まとまりのないところはご諒承ください。

正機